

大航海時代と戦国日本（3）（家康～家光）

二階堂 玲太

■家康の困惑

秀吉は、天正15年(1587)にバテレン追放令を發布したが、慶長3年(1598)秀吉が没するとキリシタン弾圧は一時的に弱まった。これは、徳川家を中心とする武断派と豊臣家を中心とする文治派との軍事的緊張が高まったので、両陣営がキリシタン大名を獲得しようとしたためであるとされている。その背景にはキリスト教を容認する世の中の動きもあった。キリスト教信者数の推移を見ると、天正9年(1581)に15万人であったものが、慶長10年(1606)には75万人になっている。

家康が関ヶ原の戦い(慶長5年)に勝利し、その後征夷大將軍になっても、豊臣家との対立関係は続いていた。慶長16年豊臣秀頼が京都二条城に家康を訪ねて天下に政権交代が示されるまで、実は畿内を中心とする豊臣政権と江戸・駿河を核とする徳川政権の二重政権の時代であったという(藤田達生著『天下統一』中公新書)。一本化されない、どちらの政権が倒れるかわかからない時代にあっては、交易とからんだキリスト教の取り扱いがブレるのは当たり前だ。

しかし、それは庶民レベルの話だけではない。肝心の家康自体がキリスト教を禁教とした結果、交易が不便になることを恐れたのだ。家康の困惑が大きいのは、家康こそ海外交易で積極的に大砲などの兵器を得ていたからだ。

家康が関ヶ原の戦いに勝利をおさめたのは、大砲をぶっ放し、西軍兵士のキモを潰したからだという説がある。家康は、大砲という当時の「びっくり仰天」兵器をどこから手に入れたのか。

家康にとっては好都合なことに、関ヶ原戦の直前に白杵湾にデ・リーフデ号(旧名、エラスムス号)が漂着したのだ。船は家康の命によって堺からさらに江戸へ回航を命じられ、積載していた19門の大砲(カノン砲)、小型砲数門、小銃500、鉄砲弾5000発、連弾300発、それに多数の鉄製の胴や胸甲が没収された。これとともにデ・リーフデ号のイギリス人航海長三浦按針(ウィリアム・アダムス)はじめ砲手をも関ヶ原に従軍させた。彼等は関ヶ原で大働きをしたのである。

家康の大砲好きは関ヶ原の時だけではなく。大坂冬の陣でも備前島の片桐且元の陣所から大砲100挺で、大坂城を砲撃した(『難波戦記』)。家康は貿易から得られるいわば文明の魅力、ことに火器の性能を捨てられない。

家康の時代は、海洋国家として交易を営むのか、キリスト教を恐れて閉じこもってしまうのか境目に立たされた。徳川幕府初期では海外との貿易も積極的であった。家康は明との外交がうまくいかない代わりに、東南アジアの国々との国交を模索する。三浦按針の提言により、イギリスとオランダに接触した。カトリックと違いプロテスタントは貿易と宗教を切り離していた。プロテスタントは、家康にとっては都合が良いキリスト教だ。これで、スペインやポルトガルのうるささを排除して、オランダに乗換えて交易すれば利潤を失わずにすむ。キリスト教は怖くない。

だが、家康(秀忠)の路線に真っ正面から挑む大名がいた。東北の雄、伊達政宗である。(以下、略)。

■鳥原の乱

鳥原の乱（寛永15年（1638）は、十二万四千人の幕府軍と三万七千人（三万未満という調査もある）の籠城軍の戦いであったが、筆頭老中松平信綱とこの内乱の遠因となった鳥原藩主松倉重政（及び嫡男勝家。『藩翰譜』では、養子重治とする）であろう。彼等の特徴は、この内乱の両サイド（幕府と一揆勢）をカムフラージュして、実際鳥原の乱でなにが行われたのかを見えなくしている。

原城は幕府軍の総攻撃により、籠城者三万七千人の屍累々の惨状を呈したとされているが、九州大学の服部英雄氏（1949年生。『蒙古襲来』、『河原ノ者・非人・秀吉』（第66回毎日出版文化賞）などの著作で有名）は、総攻撃の時は約七千人に減っていて、三万人は原城から逃亡したという史料があるという。その事実を裏付けるように、薩摩藩の奇怪な動きがあった。乱の決着の二ヶ月後一揆の首謀者を捕らえて大坂に送ったという記録があるというのだ。しかも、琉球国に対し、一揆の残党が琉球に落ち延びているだろうから、生け捕りにしてほしい、と要望したという。薩摩は琉球を窓口として明国はじめ世界の商圏と繋がっている。キリシタンには格好な逃亡ルートであった。

総攻撃の時は必ず一ヶ所は逃げ道を開けておくという「作法」に、もし幕府が従っていたとすれば、幕府軍はもぬけのからになった原城をゆうゆうと攻撃したことになる。幕府軍は鎮圧の初期から失態続きで1万（諸説あり）を超える兵を失っている、怒りがあった。

総攻撃ともなれば死に物狂いになった籠城軍に思わぬ反撃に遭うかも知れない。逃げ道作戦をしたはずである。これで、幕府軍は安心して籠城軍七千を「皆殺し」に出来て、完全な勝利を得た。

時間を一揆勃発が江戸に伝えられた頃に戻すと、松平信綱は総司令官板倉重昌を督戦すべく江戸を發った。板倉がまだ鳥原へ向かっている途中であった。幕閣では、板倉重昌の一揆鎮圧に危惧の念を抱いた。いかに背後に幕府の威光があるにせよ、陣屋暮らしの1万1千石のやっとな大名と呼ばれる石高で、率いてゆく家来が300人程度である。板倉では荷が重すぎる、御三家の当主が総司令官になっても良い事態である、という声があがった。

それで、筆頭老中松平信綱が腰をあげた。知恵伊豆（信綱）としては、板倉の働きぶりを見届ければ良いという気分だった。ところが、板倉としては、信綱が到着する前に一揆を鎮圧しなければならぬ、という脅迫観念に取り憑かれた。彼は悲愴な攻撃をし、戦死した。

信綱は物見櫓から原城を見て用意ならぬ一揆だとわかった。キリシタン信者ばかりでなく、百姓も多い。領主の毎年の年貢の取り立ての激しさに、これでは生きてはゆけぬ、いずれは死ぬならば一矢報いてやると捨て鉢になっているとも聞いた。司馬遼太郎は、「ごろつき」政権に彼等は追いつめられたのだと喝破し、領主松倉重政を非難した。

松倉重政は、大和国五条藩（奈良県五条市）では名君と謳われたが、肥前鳥原藩（長崎県鳥原市）主となると暴君と呼ばれた。それは重政の隠れていた凶暴性が露呈したのだ、と片付けられている。しかし果たしてそうだったのだろうか。

重政は、新井白石の『藩翰譜』によれば、大坂の陣のとき藤堂高虎という徳川家の諜報を握った男に愛されたという。妻の父は、石田三成の家老島左近である。

重政はキリシタンの本拠地フィリピン群島のルソン島をたたくために、海外出兵計画をたてた。いよいよ出兵という時、重政は寛永7年（1630）小浜温泉（普賢岳の西麓）で急死した（出帆5日後に亡くなったともいう。幕府の暗殺説もある）。

重政は原城を廢城にし、その石材などを鳥原城に転用したとされるが、実は？当時の原城は城とし

て機能しうる状態だった、と平成4年の発掘調査で報告されている。一揆勢が立て籠もった原城は廃城でなく、強固だったのだ。

信綱もやはり早期に一揆勢を屈服させたい。そこで彼はオランダのデ・ライブ号に砲10門をのせて、断崖上にある原城を洋上から砲撃した。450発(100発とも)の弾を打ち込んだ。

さすがに、これには幕府の内部から批判の声があがった。オランダという外国勢を使い、一揆を鎮圧するとは徳川武士の名折れである。信綱はオランダの応援をことわざるをえない。

しかし、背後にある事情は、幕府がオランダの援助を受け続ければ、必ずオランダはスペインの宣教師の巢窟であるマニラを制圧することを勧めるだろう。幕府には異境でスペインと戦うつもりはない。信綱が原城制圧を急いだのは人心の動揺を防ぐためだけではなかった。幸い島原の乱は冬季に起きた、春となれば季節風が日本に向かって吹く。マニラから島原へ続々と宣教師が押し寄せてくるだろう。その前に島原は片付けなくてはならない。幕府とスペイン艦隊とを一触即発の状態に追い込もうとする勢力があった。

かつて松倉重政は、ルソン攻略を幕府に進言した。幕府としては、正規の大名にルソン攻略を命じ、戦況が悪化したとすれば幕府軍を出兵せざるを得ない。たとえ、見捨てたとしても勢いに乗ったスペインは日本まで押し寄せてくるだろう。松倉のようにスペインと交戦を企てる、血気の多い大名達がほかにもいる。ことに乱を望む九州の大名たちには油断が成らない。(以下、略)

■鎖国の世紀

スエーデンから発した大砲の波が大航海時代の影の主演であった。大砲は、狭いところは幅40キロほどの水路となる、マラッカ海峡から海賊どもを追い払った。

ユーラシア大陸に大航海時代の終焉がこようとしていた。

ヨーロッパの国々は三十年戦争(1618～48)という血なまぐさい戦争に放り込まれた。イギリスは「航海条例」を発し輸送手段の国家管理をめざした。総じて、彼等は「国力増強鎖国」を実施した。

秀吉は明朝との交易のため干戈にうったえたが、清朝に交代して対キリスト教鎖国に入った。朝鮮半島の李王朝は朱子学を守るためキリスト教を退け、鎖国した。

日本は島原の乱が終結した翌年に寛永鎖国(第1次1633～第5次1639)に入った。これは、表向きは対キリスト教鎖国であった。だが、幕府の鎖国政策が粛々と行われたわけではない。

鎖国下の幕府が、オランダを介して貿易を続けていた実体は興味深い。オランダは絶えず幕府を世界の交易圏から孤立させようと企んだ。マラッカ海峡を支配すれば東南アジアの海を支配できる。オランダは寛永18年マラッカ攻略に成功しポルトガル、スペインを排撃した。徳川幕府の鎖国体制が整ったのは、日本との貿易権を独占しようとするオランダの策謀も大きな要因だろう。

世界は様相をがらりと変えていた。どの国も鎖国したのである。鎖国は、17世紀のア・ラ・モード(最新流行)といわれる所以である。ただ、いつまで鎖国を続けるのかが問題になった。西は18世紀に鎖国を解いたが、東は19世紀後半になっても鎖国を続けたのである。

角山栄著『茶の世界史』(中公新書)によれば、日本が鎖国した前後の時代に、オランダやイギリスの社交界で茶がもてはやされたという。ことに、足利義政以来続いた日本の「茶の湯」を中心とする芸能文化、さらに茶碗、茶器などの美術工芸品から茶の入れ方、マナーにいたるまで、長い歴史的伝統文化の輝きに西洋人はいかれてしまった。シナ、日本の陶磁器が西洋に向かって輸出されはじめ

た。

かつて秀吉はルソン壺に惚れて海外派兵を計画したといわれる。そして、信長のように領地の代わりに茶器を部将の褒賞とした領主もいた。

徳富蘇峰は、「信長は茶の湯については、ほとんど自制力を失うほどの数寄者であった」とし、「茶の湯はどこまでが道楽で、どこから実用であったかの分界は、明確に定めがたいが、その定めがたい所に妙味があった」（『近世日本国民史 桃山時代概観』）と半ばあきれた感想を漏らし、さらに「秀吉の時代、日本は島国的でなし、東洋的でなし、全く世界的であった」とし、それらを失った次の時代を批判した。

オランダなどと細々とした交易をしていた、徳川幕府が西洋の怖ろしさと再び接触するのは、幕末の熾烈な時代になってからであった。

玲た